中学校第１学年　Ｅ　球技　イ　ネット型「バレーボール」　小竹町立小竹中学校

単元の目標

知識及び技能	競技の特性や行い方、ボール操作等について理解するとともに、基本的なボール操作と定位置に戻るなどの動きにより空いた場所をめぐる攻防ができるようにする。
思考力、判断力、表現力等	攻防における自己やチームの課題を発見し、合理的な解決に向けた運動の取り組み方を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えることができるようにする。
学びに向かう力、人間性等	バレーボールの学習に積極的に取り組むとともに、一人一人の違いに応じたプレイなどを認めようとすること、健康・安全に気を配ることができるようにする。

※共：男女共習

	1	2　3　4	5　6　7
ねらい	競技の特性やボール操作等について理解するとともに、自己の課題を見つけることができる。	基本的なボール操作（オーバーハンドパス、アンダーハンドパス、アンダーサービス）を身に付け、簡単なゲームを楽しむことができる。	チーム全員が活躍するために、ルールを工夫し、空いた場所をめぐる攻防を楽しむことができる。
導入	準備運動（ストレッチの紹介を兼ねる）	**共：心と体をほぐすために、チームでコミュニケーションをとりながら準備運動を行う。（ペアやチームでストレッチ、ボールを使ってのストレッチや補強運動等）**	
展開	競技の特性や行い方、基本的な動きについて理解することができるように、映像等を使って説明する。 ボール操作やプレイ中の動きの課題を見つけるために、試しのゲームを行う。 １チーム 3～4 名（男女混合）とする。	動きのポイントを提示し、オーバーハンドパス・アンダーハンドパス）の練習を行う。 **共：生徒が自分の技能に合わせて練習に取り組むことができるように、バウンドの回数（ノーバウンド、ワンバウンド以内、ツーバウンド以内）を生徒が選択できるようにする** **共：生徒が仲間と関わり合いながら繰り返しボール操作に挑戦できるように、2 人組で行う練習方法、４人（チーム）で行う練習方法を提示する。** 練習した動きを全員で確かめるゲームを行う。 行い方：１チーム 3～4 名、５分間、通常のコート **共：生徒が練習の成果を実感できるように、バウンドの回数（個人）、コンタクトの回数（チーム）を制限したゲームを提示し、対戦相手との話し合いのもとに選択できるようにする。** バウンドの回数⇒A：ノーバウンド、B：ワンバウンド以内、C：ツーバウンド以内 コンタクトの回数⇒A：３回以内、B：４回以内、C：５回以内	チームの構成：１チーム 3～4 名（６チーム） コートの使用：３チームで１コート使用（A 対 B のゲーム中、C が動画を撮影する時間とする。） 行い方：１チーム 3～4 名、５分間、通常のコート ゲーム１：A 対 B、A 対 C、B 対 C （各チームのプレイ時間を保証するため、時間制で行う。） **共：①試合終了後、チーム全員が活躍するためにどのような工夫が必要か考える。コート内の人数、コートの大きさ、バウンドの回数、コンタクトの回数等** **②考えた工夫を対戦チームに伝え、ア：両チーム共通で設定すること、イ：チームごとに設定すること、を確認する。** ゲーム２：A 対 B、A 対 C、B 対 C （各チームのプレイ時間を保証するため、時間制で行う。）
終末	今後の学習の見通しをもつことができるように、ボール操作やプレイ中の動きについての課題を話し合う。		自分や仲間が活躍できたことを確かめるために、ゲーム２の様子とゲーム１の様子の動画を見て比較し、工夫の効果（楽しさ・触る回数・ラリー回数・ボールを持たないときの動き）を確かめる。 次時学習への見通しをもつことができるように、効果のある工夫について全員で共有する。
	振り返り（授業後アンケート）の記入		

評価規準

【知識・技能】
①オーバーハンドパス、アンダーハンドパスの動きのポイントを理解している。
②パスとレシーブでボールをコントロールすることができる。

【思考・判断・表現】
①仲間と協力する場面で、分担した役割に応じた活動の仕方を見つけている。
②自分や仲間が全力ゲームを楽しむための方法を見つけ、仲間に伝えている

【主体的に学習に取り組む態度】
①学習に積極的に取り組むもうとしている。
②マナーを守ったり相手の健闘を認めたりして、フェアなプレイを守ろうとしている。

知識・技能		①	①	②			②
思・判・表				①	①②	②	
主	①						②

個人やチームの課題解決に適した活動やルールの工夫
中学校第１学年　Ｅ　球技　イ　ネット型「バレーボール」
小竹町立小竹中学校

１　単元の目標

○競技の特性や行い方、ボール操作等について理解するとともに、基本的なボール操作と定位置に戻る動きにより空いた場所をめぐる攻防ができるようにする。【知識及び技能】
○攻防における自己やチームの課題を発見し、合理的な解決に向けた運動の取り組み方を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えることができるようにする。【思考力、判断力、表現力等】
○バレーボールの学習に積極的に取り組むとともに、一人一人の違いに応じたプレイなどを認めようとすること、健康・安全に気を配ることができるようにする。【学びに向かう力、人間性等】

２　共生を基盤とした授業づくりにおける仕掛け

（１）個人の技能に合わせて取り組むことができるための工夫

本実践の基本となる技能として、パスを行う際のボールコントロールがあげられる。この基本的な技術が不十分な場合、チームに迷惑をかけてしまうという理由からボールをできるだけ触らず、コートの端にただ立っているだけとなってしまう生徒が出てしまう。これを解消し、男女差や技能差を補うことができ、ボールに積極的に触ろうとする意欲を引き出すために、生徒が自らの技能に合わせてバウンド回数（ノーバウンド、ワンバウンド以内、ツーバウンド以内）を選択できるようにした。その際、バレーボールの動きの特性として、ボールの落下点に動くことが求められるため、最初はノーバウンドから挑戦させ、それが難しい状況の場合はバウンドしたボールを操作できるようにした。

（２）チームの技能に合わせたルールの工夫

チームの技能に合わせたルールの工夫として、コンタクト回数を選択できるようにした。回数は３回以内、４回以内、５回以内を選択させることとした。また、パスゲームを行う際、１人の生徒が１回で相手コートへ返球し他の生徒がボールを触れないようなことが起こらないために、コンタクトの最低回数も設定させ、より多くの生徒がゲームの中でボールを触る機会を増やすようにした。

（３）生徒同士が学び合いながら行う工夫

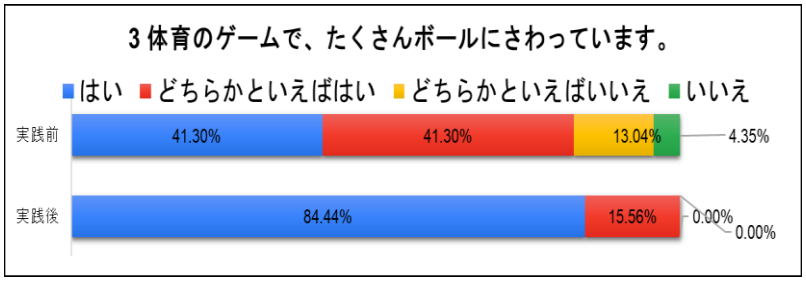
生徒がボール操作に挑戦する場面では、仲間と関わり合いながら活動できるように、２人組や４人組でできる練習方法を提示した。また、生徒が自分たちのチームの動きを客観的に捉えることができるように、ゲームを行っていな

いチームの生徒にタブレットで動画を撮影させた。その動画をチームで確認し、自分や仲間が活躍できたかどうかを確かめさせ、どのような工夫をすればより自分や仲間が活躍できるかを話し合わせた。話し合う視点としては、楽しさ、１人１人がボールを触る回数、ラリーを続けられた回数、ボールを持たないときのカバーの動きである。この視点に沿ってチーム内の話し合いを行わせ、ゲームを重ねるごとにチームの連携が高まっていくことを目指した。

３　成果と課題

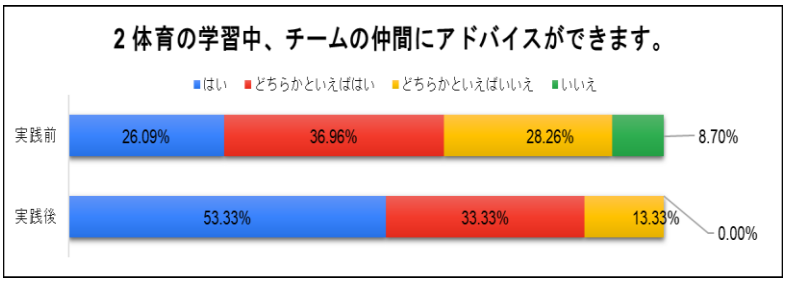
（１）成果

○　単元前後に行った「体育の学習に関する生徒アンケート（21 項目質問紙アンケート）」において、たくさんボールにさわっていると回答した生徒が大幅に増加したことから、個人やチームの技能に合わせてバウンド回数やコンタクト回数を選択できるようにしたことで、単元を通して技能差に関わらず意欲的に学習に取り組むことができた。



○　チームの課題解決をする上でゲーム中の動画を撮影し、その動画を基に話し合う活動を設定したことで、自分たちの動きを客観的に見ることができ、ボールを持たないときのポジショニングや動きだしを速くするための基本の構えができるようになった。その結果、今まで失点していたボールを繋ぐことができるようになり、ラリーが続く楽しさを味わうことができた。

○　単元前後アンケートにおいて、仲間にアドバイスができると回答した生徒が大幅に増加したことから、ゲームを行う際に、チームの技能に合わせルールを工夫したこと、練習の際に、2 人組、4 人組と、仲間と関わり合う活動を設定したことにより、単元を通して男女差、技能差に関わらず生徒同士が学び合う学習が展開できたと考える。



（２）課題

○　今回、生徒のパス技能を補うためにバウンドしたボールを操作できるようにした。しかし、バウンドしたボールを操作した生徒は、バレーボールの１つの特性であるボールの落下点に入る動きを身につけさせることが不十分であった。そこで、重さや落下速度が異なり、操作のしやすいボールを選択することができるようにするなど、用具を工夫することでバレーボール本来の特性を失うことなく操作の不安を軽減できるための工夫が今後必要である。

中学校第３学年　Ｅ　球技　ウ　ベースボール型「ソフトボール」　朝倉市立甘木中学校

単元の目標

知識及び技能	競技の特性や行い方、基本的なバット操作や走塁など攻撃の技能、ゴロやフライの捕球と送球、定位置での守備など、技能等について理解するとともに、安定したバット操作により出塁・進塁・得点し、仲間と連携した守備で攻防を展開することができるようにする。
思考力、判断力、表現力等	攻防などの自己やチームの課題を発見し、合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えることができるようにする。
学びに向かう力、人間性等	ソフトボールの学習に積極的に取り組むとともに、一人ひとりの違いに応じたプレイなどを認めようとすること、健康・安全に気を配ることができるようにする。

※共：男女共習

	1	2　3　4　5	6　7　8　9
ねらい	競技の特性や基本技能等について理解するとともに、自己の課題を見つけることができる。	安定したバット操作、走塁、ボール操作、連携した守備を身に付け、自分にあった条件のもと、ゲームを楽しむことができる。	身につけた技能を生かして、チーム全員が自己の技能レベルに応じて活躍することができるよう、個人やチームに応じた条件を考え、お互いの違いを認め合いながらゲームを楽しむことができる。
導入	準備運動、キャッチボールを行う。	共：心と体をほぐすために、チームでコミュニケーションをとりながら準備運動を行う（ペアやチームでキャッチボールやバッティング練習、各種ノックでの守備練習など）。	
展開	競技の特性や行い方、基本的な動きについて理解することができるように、ICT 機器等を使って説明する。 バット操作や守備の課題を見つけるために、試しのゲームを行う。 1 チーム 8～9 名（男女混合）とする。 プレイ時間を保障するため、時間制で行う。	動きのポイントを提示し、バッティング及び守備練習を行う。 ・ティーバッティング ・トスバッティング ・シートノック 共：生徒が自分の技能に合わせて練習に取り組むことができるように、金属及びプラスチック製のバット、通常及び柔らかいボール、ティーを準備し、生徒が選択できるようにする。 共：守備において、それぞれの技能レベルを考慮し、適材適所で守備位置につくことができるよう話し合いを行う。 練習した動きを全員で確かめるゲームを行う。 共：生徒が練習の成果を実感できるように、条件付きのゲームを提示し、対戦相手との話し合いのもとに選択できるようにする。 〇条件⇒方法Ａ～Ｃと道具ア～ウを選択し、相手に宣言する。 方法Ａ：通常のルール　Ｂ：トスによる　Ｃ：ティーの使用 道具ア：金属バット・通常のボール イ；　プラスチック製バット・柔らかいボール ウ：金属バット・柔らかいボール	チームの構成：1 チーム男女混合の 8～9 名 ゲーム：A 対 B・C 対 D（各チーム攻防のプレイ時間を保証するため、時間制で行う。） 共：①２回表裏終了後、さらにチーム全員が活躍するためにはどのように条件の付加修正を行えば良いか、チームで話し合いを行う。 攻撃：方法、道具など 守備：守備位置など ②考えた条件を対戦チームに伝え、ア：両チーム共通で設定すること、イ：チームごとに設定すること、を確認してゲームを再開する。 ③それ以降も、随時条件の付加修正を行うことも可能とする。 ゲーム：A 対 C・B 対 D、A 対 D・B 対 C も同様に行う。
終末	今後の学習の見通しをもつことができるように、バット操作や走塁、また守備の動きについての課題を話し合う。		用いた条件のもと、自分や仲間が活躍できたことを確かめるために、２回表裏とそれ以降の様子を比較し、条件の工夫の効果を確かめる。 次時学習への見通しをもつことができるように、効果のある条件の工夫について全員で共有する。
	整理運動、振り返り（授業後アンケート）の記入		

評価規準

【知識・技能】
①基本的なバット操作や走塁など攻撃の技能、ゴロやフライの捕球と送球、定位置での守備など動きのポイントを理解している。
②安定したバット操作と走塁、ボール操作と連携した守備で攻防を展開している。

【思考・判断・表現】
①ボール操作及びボールを持たないときの動きにおいて、自己や仲間の課題を発見し、解決できるようにしている。
②それぞれの技能レベルに応じて、自分や仲間が全力でゲームを楽しむための方法を見つけ、それを仲間に伝えている。

【主体的に学習に取り組む態度】
①学習に積極的に取り組むもうとしている。
②一人ひとりの違いに応じたプレイを認め、マナーを守ったり相手の健闘を認めたりして、フェアなプレイを守ろうとしている。

知識・技能		①	①	②				②	
思・判・表					①	①②	②		
主	①								②

実践事例

生徒一人ひとりが違いを認めて楽しむことができる場や条件の工夫
中学校第３学年　Ｅ　球技　ウ　ベースボール型「ソフトボール」
朝倉市立甘木中学校

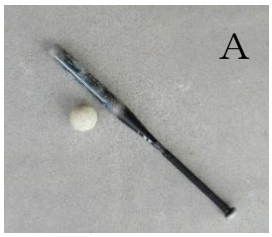
１　単元の目標

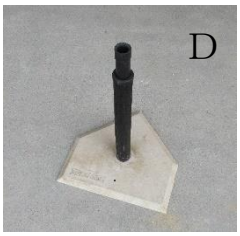
○競技の特性や行い方、基本的なバット操作や走塁など攻撃の技能、ゴロやフライの捕球と送球、定位置での守備など、技能等について理解するとともに、安定したバット操作により出塁・進塁・得点し、仲間と連携した守備で攻防を展開することができるようにする。　【知識及び技能】
○攻防などの自己やチームの課題を発見し、合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えることができるようにする。【思考力、判断力、表現力等】
○ソフトボールの学習に積極的に取り組むとともに、一人ひとりの違いに応じたプレイなどを認めようとすること、健康・安全に気を配ることができるようにする。　【学びに向かう力、人間性等】

２　共生を基盤とした授業づくりにおける仕掛け

（１）生徒一人ひとりの技能に応じて、それぞれが活躍できるチーム作りや用具・場の工夫

①グルーピング：スキルテストや試しのゲームの結果をもとに、チームごとの技能の程度や男女の割合が均等になるようにチームを編成した。
②用具や場：Ａ：正式ルールの金属バット・ボール、Ｂ：ティーボール用のバット・ボール、Ｃ：プラスチック製のカラーバット・柔らかいゴムボール、を各チームに準備し、生徒一人ひとりが技能を発揮しやすい用具を選択できるようにした。また、バッティング時においては、Ｄ：ティーの使用も可とし、バットにボールが当たる（ヒットを打つことができる）確率を高めた。





また、技能差にかかわらず、誰もが活躍できるように、Ｅ：様々な条件が記されたサイコロを準備した。サイコロは２種類あり、内容は以下の通りである。

攻撃時使用：逆敬遠、三振なし、ランナー進塁の３つ 守備時使用：敬遠、プラスチック製と柔らかいボール使用、２塁までの進塁制限、ティーボール用使用、二振でアウト、一振でアウトの６つ

サイコロは、ゲーム中に使用できる回数を制限し、チームで話し合って使用することとした。

（２）男女共修において「わかる・できる」楽しさを味わうことのできる仕掛け

練習において、バッティング練習では、野球経験者もしくはバッティングが得意な生徒がトスを上げたり、ポイント表を使ってフォームをアドバイスしたり、道具の選択に関してアドバイスしたりするようにした。ポイント表とチェックリストを準備し、正しく技能の動作を行うことができているか確認できるようにした。

【道具の選択に関してアドバイスをする姿】

守備練習においては、生徒個々の技能が発揮できるように守備位置を考えるよう促した。ボールがよく飛んでくる守備位置を守る生徒、打者の技能を考慮した守備位置の工夫など、適宜助言を行った。

ゲームにおいて、攻撃ではチャンス場面で、打席に入った生徒の道具の選択が適切かどうか、その

時の状況を確認して発問し、生徒の思考を促した。守備については、打者が右打ちか左打ちか、選択した道具が何かにより、守備位置を確認する時間を設け、チームの話し合い活動を大切にした。さらに、両チームともに、自分や仲間が活躍できたことを確かめるために、２回表裏とそれ以降の様子を比較し、条件の工夫の効果を確かめる時間を設けた。

また、単元を進めていく中で、攻撃側のチャンス及び守備側のピンチの場面で、苦手意識のある生徒も楽しく取り組むことができるよう、サイコロを活用した。（前項Ｅ）サイコロを使うことで、苦手意識のある生徒も活躍しやすい状態をつくることができた。

（３）生徒同士の学び合い、授業者と生徒の関わりの効果

生徒同士の学び合いでは、野球の得意な生徒が苦手な生徒に、男女関係なく積極的に教えたり励ましたりする姿が多く見られた。基本的技能について、チーム内で互いの経験やポイント表を基にアドバイスをして練習に取り組んでいた。また、ゲームにおいてはその都度打ち方やボールの投げ方、捕り方などについてアドバイスをし合ったり、失敗したら励まし合ったり成功したら称賛し合ったりすることができていた。その結果個人の基本技能や連携した守備の技能が向上した。

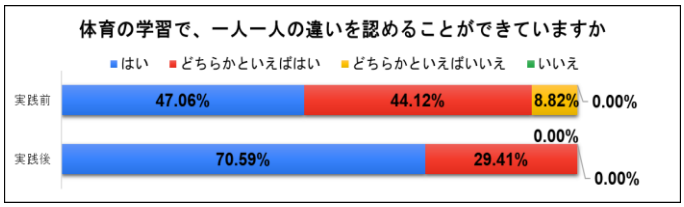
【お互いに声をかけ合って練習する姿】

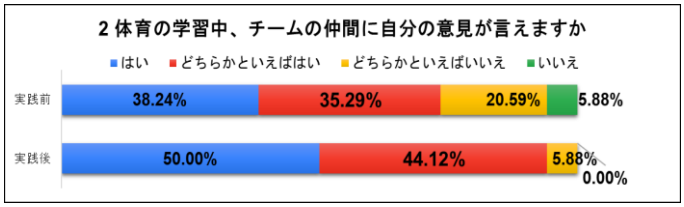
授業者と生徒の関りについては、生徒が道具の選択や守備位置の工夫について様々な考えをもつことができるように、適切に発問するよう心掛けた。これにより、生徒は「私は金属の方が打ちやすいと思う。」、「ファーストに捕りやすいボールを投げるから安心して守備できるよ。」など、自分の考えを積極的に伝えたり、お互いに意見を交換したりしてゲームを行うことができた。

３　成果と課題

（１）成果

○　チームごとの技能の程度や男女の割合が均等になるようにチームを編成したことや、用具や場を工夫したことにより、生徒全員が意欲的にゲームを行うことができた。これにより、学習後に実施したアンケート（４件法）では、一人ひとりの違いを認めることができる生徒が増えた。





○　生徒同士の学び合いに対する適切な称賛や、生徒の「考えよう。」「伝えよう」という意欲や意識を高める発問により、自分の意見をチーム内の生徒に積極的に伝えようとする生徒が増えた。

（２）課題

○　生徒一人ひとりが違いを「認める」ことについて、今回は「チーム間の技能差をなくす。」ことを仕掛けとして考えたが、今後は、「チーム間の技能差があっても、違いを『認める』」ことができるような授業づくりに取り組んでいきたい。そのためには、生徒が今以上に学び合うことができる場や用具、ルールの工夫、特に、技能差があっても拮抗する場面が生じるゲームの在り方について教材研究に努めたい。

中学校第３学年　Ｂ　器械運動　エ　跳び箱運動　飯塚市立筑穂中学校

単元目標

知識及び技能	体力の高め方や運動の観察方法を理解するとともに基本的な技を滑らかに安定して行い、発展技を行うことができるようにする。
思考力、判断力、表現力等	技などの自己や仲間の課題を発見し、合理的な解決に向け自己の考えたことを他者に伝えることができるようにする。
学びに向かう力、人間性等	自主的に取り組むとともに、互いに助け・教え合おうとすることや一人一人の違いに応じた課題や挑戦を大切にしようとすることができるようにする。

※共：男女共修

	①	②　③　④	⑤　⑥　⑦	⑧
ねらい	競技の特性や技の名称について理解するとともに自己の課題を見つけることができる。	基本的な技（開脚跳び、抱え込み跳び、台上前転）を身に付けるために、ポイントカードを活用し個人の技能を高めることができる。	課題解決のために、ＩＣＴ機器を活用したアドバイス活動を行うことを通して、条件を変えたり、技の完成度を高めたりすることができる。	一人ひとりの違いに応じた課題や挑戦を大切にしようとすることができる。
導入	準備運動（ストレッチの紹介含）	グループ別に技に必要な準備運動や補強運動を話し合いながら準備運動を行う。（体つくり運動の学習を活用する）		
展開	競技の特性や技の名称について理解できるように、映像等を使って説明する。 自己の課題を把握するために、基本的な技の試し跳びを行う。その際、ペアを作りチェックシートを活用して互いの試技を評価させる。 今後の学習の見通しを持つことができるように、発表会の評価方法について説明し、出来栄えも評価していくことを説明する。	【個人メインの活動】 動きのポイントを提示し、基本的な技（開脚跳び、抱え込み跳び、台上前転）を行う。 習熟度別学習 共：生徒が自分の技能に合わせて練習ができるように、習熟度別でのコースを設定し、自己にあった練習ができるようにする。 技別学習 共：生徒の目標となる技別にコースを設定しポイントカードを活用して互いの技を観察・評価し改善点をアドバイスできるようにする。 【グループメインの活動】 グループに戻り、個別で学習した技のポイントを共有し、練習する。 共：実施していない技のポイントも理解できるようにする	基本的な技・発展的な技（頭跳ね起き跳び、前方倒立回転跳び等）の復習をグループで行う。 発表会に向けて発表する技を決め、発表順（構成）を話し合う。 共：一人一人の体格、能力などの違いに応じて発表の技を決定できるようにする。そのために、技の難度と出来栄え両方を評価し、苦手な生徒も自分にあった技を選ぶことができるようにする。 グループで課題解決に向けて練習を行う。 共：ICT 機器を活用し、動画を撮影し模範演技と比較・考察させアドバイスを行うことによって、技の習得や完成度を高めることができるようにする。	発表会を行う グループで相互評価を行う。 共：競技会での採点方法を取り入れ、技の難易度だけでなく出来ばえを評価に加えることにより、一人ひとりに応じた挑戦を大切にできるようにする。
終末	整理運動、振り返り（授業後のアンケート等）の記入			

評価規準

【知識・技能　】
①基本的な技を身に付け、条件を変えて行ったり、技の完成度を高めたりして行うことができる
②体力の高め方や運動観察の方法を理解している。

【思考・判断・表現】
①技に必要な準備運動や事故が取り組む補助運動を選ぶことができる。
②ICT 機器等を活用し、自己や仲間の技の課題を発見・アドバイスができる。

【主体的に学習に取り組む態度】
①学習に自主的に参加しようとしている。
②互いに助け合い、教え合おうとしている。
③一人ひとりの違いに応じた課題や挑戦を大切にしようとしている。

知識・技能				①		②	①	
思・判・表		①	①			②		
主	①				③		②	③

実践事例

男女混合グループによる評価方法・課題解決の工夫

中学校第３学年　Ｂ　器械運動　エ　跳び箱運動

飯塚市立筑穂中学校

１　単元の目標

○運動の観察方法を理解するとともに基本的な技を滑らかに安定して行い、発展技を行うことができるようにする。【知識及び技能】
○技などの自己や仲間の課題を発見し、合理的な解決に向け自己の考えたことを他者に伝えることができるようにする。【思考力、判断力、表現力等】
○自主的に取り組むとともに、互いに助け・教え合おうとすることや一人一人の違いに応じた課題や挑戦を大切にしようとすることができるようにする。【学びに向かう力、人間性等】

２　共生を基盤とした授業づくりにおける仕掛け

（１）グルーピングの工夫

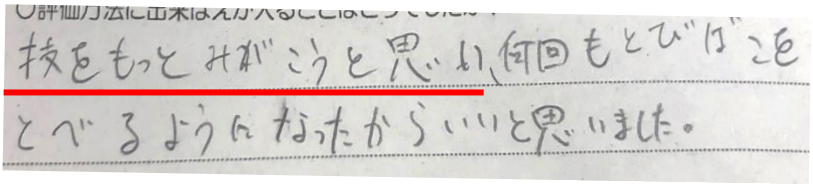
本学習は、グループでの活動（学び合い）が主となる。そのため、グルーピングについては第１時に各自ができる技を確認し、各グループ技能差を平準化した男女混合のグループを作った。グルーピングの工夫を行うことにより、各グループの学び合いが活性になった。特に、男女混合としたことで、難易度の高い発展技を男子が練習する場面において、女子が男子の動画を撮影したり、ポイントと比較したりする場面が増えた。技能の高い生徒がよい手本となり、生徒一人ひとりの学習に対する意欲付けや、技に直接取り組まなくても、動きのポイントを理解する機会となった。跳び箱運動を苦手とする生徒の振り返りでは、「挑戦こそはできなかったが、技のポイントを学ぶことができた。」という記述もあり、グルーピングの工夫は技能差に関係なく、生徒が動きのポイントを理解する上で有効であった。

【学習後の女子生徒の感想】
男子の上手い人を見て、「こうやってやると、自分もうまくいくかも。」と思って挑戦しました。男子と女子で協力してアドバイスし合えたことがよかったです。

（２）評価方法の工夫

単元のまとめとして発表会を行った。発表会の方法として実際の体操競技の採点方法を取り入れ、Ｄスコア（技の難度）とＥスコア（技の出来ばえ）で評価し、グループの平均で順位を競う方法で行った。行う技については自己の能力に応じて基本的な技（開脚跳び・台上前転）、発展的な技（かかえこみ跳び・首はね跳び・頭はね跳び・前方倒立回転跳び）を選択できるようにした。

評価方法にＥスコア（出来ばえ）を入れたことは、跳び箱運動が苦手な生徒の練習に対する意欲付けになった。基本的な技を選択しても出来ばえを高めることで、発展的な技と同等の点数を取ることが可能になり、生徒は自己の能力に応じた技を選択し、出来ばえを高めようとタブレットを活用し自分の動きを確認する場面が増えた。

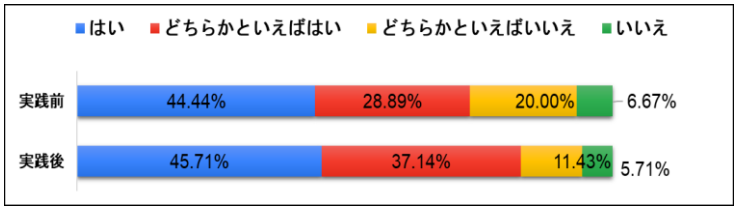


（３）課題解決の工夫

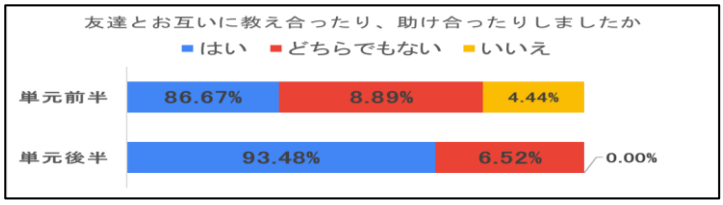
タブレット端末を活用し、自分が跳んでいる様子を同じグループの生徒に撮影してもらい、自己の課題を把握できるようにした。その際、技能差に関係なく生徒同士がポイントを学び合う場を設定した。ICT 機器を活用し、自分の動きを確認・フィードバックする活動は、生徒の学習意欲の向上につながると考えた。グループでの評価という点もあり、技能の高い生徒は自分の練習だけでなく、同じグループの生徒にポイントを教えるなどの主体的な活動が増えた。できなかった技ができるようになった場面ではグループ全員で歓声を上げ、拍手で成功者を讃えるなどグループで活動する喜びを感じている様子であった。

３　成果と課題

（１）成果



○　グルーピングの工夫により、男女差・技能差に関係なく１つのグループとして活動する場面が増加した。「体育の学習に関する生徒アンケート」(21 項目質問紙アンケート）において、「体育の学習で、体力に差がある仲間と協力できると楽しい。」と回答した生徒は学習後増加したことから、男女混合・能力混合のグルーピングは生徒の学び合いに効果があったと考える。



○　授業の振り返りアンケートの結果、授業の回数を重ねるにつれて「友達とお互いに教え合ったり、助けあったりしましたか」項目について、「はい」と回答した生徒が増加し、単元後半では「いいえ」と回答した生徒は０人となった。このことから、評価方法の工夫や課題解決の工夫を行うことは生徒の教え合いや関わり合いに効果があると考える。

（２）課題

○　跳び箱運動は、自分で動いて動きを高めることから、効果的なグルーピングによる学び合いを自分の動きづくりに生かしやすい。今後は、集団で動きを高める球技等においても、男女差・技能差関係なく動きづくりに取り組むことができるようなグルーピングの在り方を考えていきたい。また、グループでの学び合いをさらによいものにするために、「どんな視点で考えるか。」、「考えたことをどのように表現するか。（言葉、図、映像等)」、さらに工夫していく必要がある。